

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## 多文化主義の国家カナダと先住民

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-10-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岸上, 伸啓 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/5779">http://hdl.handle.net/10502/5779</a>

# 多文化主義の国家カナダと先住民

国立民族学博物館 岸上 伸啓

## (1) 新天地としての北米

北米は新世界と呼ばれるように、ヨーロッパから入植者がやってくるまでは、先住民が住む、ヨーロッパ世界とは隔絶された未知の大陸であった。

現在の北米は、もの、人、金、情報をもっとも多く集まり、かつ交流する場所の一つになっている。われわれにはアメリカにせよカナダにせよ、英語を母語とする白人の国というイメージが強いが、両国とも先住民、入植者、そして後の移民から構成される雑多な民族と文化が錯綜し、共存する世界である。

ここでは、現在のカナダがどのような民族や人々から構成され、どのような関係を歴史的に形成しながら人々が生きてきたかを、先住民に焦点をあてながら素描してみたい。そして現在、国家統合のための政策の一つとしてカナダで試みられている多文化主義について紹介する。

## (2) カナダの現状と歴史

カナダの総人口は2,900万人あまりである。1991年の国勢調査の結果によると、現在のカナダは、英系40%、仏系27%、ドイツ系3%、イタリア系3%、中国系2%、先住民2%、ウクライナ系2%、その他21%から構成されている。このように、英仏系を中心に多数の民族・文化的なバックグラウンドをもつ人々が集まってできあがった国である。異質な集合からなる国家の政治的統合は、複雑であり、困難なものである。

現在のカナダにヨーロッパから入植者が到来するまでは、極北地域にイヌイット、森林の亜極北地域にクリーやオジブアなど、北西海岸地域にはセイリッシュ、クワキウトル、ハイダなど、東部地域にはヒューロン、イロクオイ、ミクマックなどの先住民が住んでいた。仏系と英系の入植者は相互に牽制し合いながら、時には争いながら、極北と亜極北など農耕や牧畜に適さない土地以外に

入植し、開墾し、そこに住んでいた先住民を追い出しながら、彼らの世界を拡大していった。また、その過程で、メティスと呼ばれる仏系の人と先住民の混血化した集団も生み出された。そしてカナダは先住民の世界からヨーロッパからきた人々が主流派になる世界へと変貌を遂げていったのである。

カナダに連邦が結成され、国家ができた1867年まで、英系の入植者と仏系の入植者との領土拡大の争いの歴史であった。そしてその連邦建国は6割の人口を占める英系カナダ人と3割の人口を占める仏系カナダ人の「契約」という形で成立した。その連邦制とはそれに参加するケベックやオンタリオなどの各州には一定の自治権を許容するというものであった。その後、大陸横断鉄道の建設など国家建設のために中国人移民らを労働力として受け入れたが、その完成後には中国人労働者の締め出しなどが行われた。メティスも弾圧されるなど、当時のカナダは英仏を中心とする白人の国であった。

1896年から小麦ブームが起り、その生産国であるカナダには、英米以外にウクライナ、ハンガリー、ポーランドなど東欧や中欧からの移民が急増し、二民族国家から多民族国家へと変化してきた。そのような状況の中で、連邦政府が移民に取った政策は、「アングロ・コンフォーミズム」と呼ばれるもので、英系カナダへの移民の同化を目的としたものであった。この政策にもかかわらず、移民集団は同化せず、国家の中に英系を頂点とする垂直なエスニック・ヒエラルキーが形成された。

第二の移民の波が1919年から1930年にかけてみられた。この移民の流入によってカナダの総人口の中に占める非英仏系の比率は18%へと上昇し、単なる同化政策では矛盾が生じるようになった。ここで出てきたのが、「メルティング・ポット論」であった。移民によるカナダへの文化的な貢献を認め、同意のもとでカナダ社会に同化させ、いろ

いろなバックグラウンドをもつ移民が時間とともに融合しあい、カナダという器の中で一つになるという考えであった。すなわち新たな「カナダ人」の創出へと流れが変わった。

第二次世界大戦の後、第三の移民の波が押し寄せ、1961年までに総人口中の4分の1が非英仏系に変わった。さらに1960年には、ケベック州が仏系が支配する近代的なケベック州建設をめざす「静かな革命」が起こった。これ以降、ケベック州は連邦からの分離・独立を主張するようになった。その後のカナダ政治は、移民問題と、ケベック州の取り扱いをめぐる展開されていった。カナダにおける英語と仏語の公用語化はその過程で生まれてきたものであった。すなわち二言語・二文化主義という英系と仏系の共存が国となったのである。一方、仏系カナダ人に対する優遇は、ウクライナ系など非英仏系の住民の反発を買い、連邦制は「二言語の枠に内での多文化主義」を採用せざるを得なくなった。1971年10月には当時の首相のトゥルードーによってカナダ連邦政府はカナダにおける民族的多様性を公認した。そして「文化的な多様性を認め、それぞれの文化的自立と共存を積極的に押し進めようとする」多文化主義が国家の理念として採用されたのである。



写真1 カナダの先住民の日（6月21日）のパレード  
（モントリオールにて）

この多文化主義を実施するに当たり、これまで見過ごされてきた先住民を考慮に入れざるを得なくなかった。1982年の新憲法では、先住民の「伝統的な」諸権利が保障されることが明記されている。すなわち、現在のカナダの多文化主義は、英仏の主流社会と移民、先住民の三つが関わり合いながら実現化が試みられているのである。

### (3) カナダの先住諸民族：カナダ社会の一側面

カナダは連邦制成立以降、英系と仏系のカナダ人からなる国とみられることが多く、先住民や移民にはあまり触れられることはなかった。しかし1990年代のカナダでは、先住民は政治の表舞台に出てきており、その動向は英・仏系主流社会が無視できない存在になってきている。

カナダの先住民は、イヌイットとファースト・ネーションズ、メティスの三つのカテゴリーに分けられる。イヌイットとは、極北のツンドラ地域を主な生活の場とし、狩猟や漁労を主な生業としてきた人々である。現在では、若者の生業離れがみられるが、カナダのヌナヴト（旧北西準州の中部および東部極北地域）とヌナヴィク（ケベック州極北部）、ラブラドールの極北部の村々で定住生活を送っている。ファースト・ネーションズとは、民族名ではなく、ハイダ、デネ、クリー、イロクオイなど複数からなる先住民族全体（一般）を指す言葉である。かつての「インディアン」という名称に相当する。メティスはすでに指摘したとおりである。

1991年の先住民人口調査によれば、カナダには先住民の血を引き、先住民意識を持っている人が100万人ほどいる。その内訳が、ファースト・ネーションズが約78万人、メティスが約21万人、イヌイットが5万人弱であった。イヌイットを除けば、カナダ先住民の半数近くは、故郷を離れ、都市や町で生活をしている。混血化や移動が進み、独自の先住民文化は大きく変容してきた。一時は、定住化、国民化という国策のもとで、その存続の危ぶまれた時期があった。

しかし、カナダ先住民は、長い植民地化と抑圧

の後、民族文化の再興・再創造の道を歩み始めた。彼らは、欧米人との接触の後、キリスト教化、国民化などを体験し、第二次世界大戦後、一時は諸民族文化や先住民諸語の消滅の危機に直面した。しかし1960年代にアメリカで始まった黒人運動、先住民運動に影響され、国際的な先住民運動の高まりの中で、カナダ政府は1970年代に入り、先住民の諸権益について政治的な話し合いを持つようになった。

水力発電用のダム開発を求める提案を受け、ケベック州の北部に住むイヌイットとクリーは、ケベック州政府を相手にダム建設、そして彼らの先住民としての権利について政治的な話し合いを行った。その結果、特定地域においてダム建設を認める代わりに彼らの土地権、生業権などを国家に承認させるとともに、ダム建設に伴う補償金を得た。1984年には北西準州西部極北地域のイヌヴィアルイトが、1993年には北西準州中・東部極北地域のイヌイットがカナダ連邦政府を相手に政治協定を締結し、先住民としての諸権利を獲得するとともに政治的な自律性を獲得してきた。国民国家そして現在の資本主義体制の中で暮らすイヌイットの生活は決して楽なものではない。しかし、国家の助けを借りて、彼らは自らの文化や言葉を再生させたり、新たに創造させたりすることができるようになりつつある。

このような先住民の政治的な自立化や先住民権の獲得は、多文化主義を標榜するカナダの中で可能になってきた。そして連邦政府と政治交渉を行い、新たな方向性を開拓する先住民グループも増加しつつある。

先住民は移民やほかの国民とともにカナダを構成し、維持させる重要なメンバーである。彼らは主流文化に同化されることなく、彼らの文化伝統に民族の誇りを持ちつつ、カナダ国民として社会に参加できる時代を迎えつつあるのである。

#### (4) 多文化主義の現状と将来

カナダは、多民族・多文化からなる国家である。カナダの歴史は、英系と仏系の歴史というよりも、



写真2 カナダ・イヌイットのハンターたち  
(1990年12月アクリヴィク村にて)

先住民そして移民を含めた多民族の対立と協調の過程であった。そしてカナダの社会的現実は、「メルティング・ポット」でも「サラダ・ボウル」でもなく、「野菜かご」に近いものである。連邦成立から100年以上たった現在でも、仏系、ウクライナ系、ユダヤ系、イヌイットや、ファースト・ネーションズ諸集団の民族の壁は厳然として存在しているのだ。

フランス革命に端を発する近代国民国家は、多様性を画一性に、異質を同質にすることで成り立つ国家理念である。一文化・一民族・一国家を前提とする国民国家の理念では、現在のカナダは国家としてはうまく機能するはずがない。その問題を解決するための処方箋がカナダの場合、多文化主義の採用だったといえる。

カナダの状況は、人、もの、情報が広範囲に交流する地球全体の縮図のようなものである。カナダの多文化主義の実施は、オーストラリアの場合と同じく、異民族、異文化の共存をはかる壮大な可能性のための実験といえる。異質な国民が差異を相互に認め合いながら共存し合える国家の構築は21世紀を迎えるわれわれの課題である。多文化主義の実験はグローバル化が進み、人の移動がさらに激しくなっている現在、日本をはじめとする国民国家や、この地球社会全体にとっての新たな可能性を開く一つの手段であると考えられるのである。

#### 【参考文献】

西川建夫、渡辺公三ほか編 1997年 「多文化主義・多言語主義の現在」(人文書院)  
綾部恒雄編 1989年 「もっと知りたいカナダ」(弘文堂)